

全国大会に寄せて

会長 岡本義行

日本の繊維産業は衰退傾向にある。実際、事業所も出荷額も減少している。アパレル生産のように国内生産が数パーセントに過ぎないものもある。その原因は部分的にはいくつか指摘されてきたが、何が根本原因であるか、研究者を含めて関係者に共通認識があるようには見えない。経済産業省の『繊維ビジョン』においても、現状の指摘にとどまっている。日本のアパレル生産は有利な環境にある。テキスタイルのように原材料を含めて、世界的に評価されている製品が少なくない。またミシンや編機のように世界を席巻している機械も日本で生産されている。技術者や職人の水準も高い。歴史の中で蓄積されてきた 繊維産業における知的資源も少なくない。

アパレル製品の競争力は一体どこから生まれるのだろうか？イタリアやフランスにおいて、日本との比較研究した経験では、コモ、パヴィア、ベルガモ、フィレンツェなど繊維産業の拠点では、地域コミュニティ、強い人間関係が産業の基盤となっているようである。学生の卒業発表には経営者が参加して人材を発掘しようとしている。もちろん、イタリアも国内だけで生産しているわけではない。外国からの留学生も戦力となる。日本でも国内生産にシフトしている企業も見られるようになった。安い労働力だけではなく、ファッション製品に関する価値観や情報の共有と創出も重要だ。

今世紀後半には、アフリカの人口は圧倒的に増加する。アフリカやアラブ世界の経済成長そして生活 水準の向上によって、アパレルやファッションへ関心は向くはずである。現在でも、ヨーロッパやアラブの空港ではわれわれが驚くほどの装いをしている人たちがいる。そうした状況に備えてか、ケルン大学の友人はアフリカや南インドへ学生を連れて研修している。ミネルバ大学のような、世界中で学べる大学も現れ人気が出ている。

世界的視野とグローバルなコミュニケーションは矛盾しない。ファッションはローカルな生活を知ることから始まる。

全国大会実行委員長

平井秀樹（国際ファッション専門職大学）

ファッション産業は、社会構造・技術革新・消費文化の変容と密接に連動しながら、常にその姿を変えてきました。とりわけ近年、デジタル技術の急速な進展は、ファッションの「作り方」「売り方」「買い方」「使い方」において、従来の枠組みを根底から揺るがす変化をもたらしています。

本大会では、「ファッションビジネスの現在地と未来」というテーマのもとファッションビジネスにおける構造的転換とその理論的・実践的含意について、多角的な視座から検討を試みます。生成 AI による デザイン支援、メタバース空間での販売・体験、ブロックチェーン技術を活用した所有概念の再構築、そしてサステナビリティを前提とした循環型消費

モデルなど、ファッションを取り巻く環境は複雑化・高度化の一途を辿っています。これらの潮流は、単なる技術的革新にとどまらず、消費者の価値観や企業の経営戦略、さらには教育・研究の方法論にまで深い影響を及ぼしています。

本学会は、ファッションを単なる産業領域としてではなく、文化・経済・社会・技術が交差する学際的研究対象として捉え、理論と実践の架橋を目指してきました。本大会が、研究者・実務家・教育者の知的交流を促進し、ファッションビジネスの未来像を構築するための有意義な契機となることを、心より楽しみにしております